

# 巻 頭 言

## 公益法人について

北海道脳神経疾患研究所 理事長 中村 博彦

北海道脳神経疾患研究所医誌（脳研医誌）第22巻をやっと刊行することができました。関係者をはじめ常日頃よりご支援をいただいている皆様方のご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。内容的にはまだまだ発展途上ですが、当院の医師が忙しい臨床の合間に一生懸命努力して書き上げた玉稿ですので、ご理解の程を宜しくお願いいたします。将来的には、中村記念病院関係者以外の諸先生方からもたくさんの原稿をいただけるような雑誌にしたいと考えていますので、これからもご支援を宜しくお願い申し上げます。

今回の巻頭言は公益法人をテーマにいたしました。法人制度改革の煽りを受けて、脳神経外科学会をはじめ、医師会や各種医療団体が法人化しています。公益法人になるにはハードルが高く且つメリットが少ないとのことで、脳神経外科学会や日本病院会などは一般社団法人となっていますが、北海道脳神経疾患研究所はご寄付を各方面にお願いする以上、公益財団法人を選び平成22年12月に北海道から認定されました。

公益財団法人に認定される決め手となった事業は、春から秋に行うモービルMRIによる脳の検診事業です。平成2年に5町村、1065名の検診からスタートし、平成8年以降は毎年20町村、2000名以上の規模になり、昨年までの23年間に延べ45市町村、4万7千人に達しています。地域に脳神経外科を有する医療機関が充実すれば私どもの検診は必要ないので、時代とともに検診する市町村も入れ替わりました。現在はオホーツク方面や財政再建団体になった夕張市を含む道内21町村で行っています。以前は中村記念病院が患者集めに利用しているのだろうと陰口をたたかれましたが、現実には疾病が発見された患者さんの大半を通院しやすい地域の中核病院に紹介しています。公益法人の妥当性を審査する委員の先生方も、その数字を見て当研究所の公益性を認めざるを得なかったようです。また、検診を行っている市町村は医療過疎で苦勞しているため、北海道の地域医療の現状が公益法人認定の後押しとなりました。

MRI検査の検査料ですが、決して裕福ではない地域の自治体に負担をかけず、住民の方々が気安く利用できるようにと低料金で検診を行っています。事業としては当然赤字になりますが、寄付を募り病院内の先生方のご協力を仰ぎながら、これからも地元からの要望がある限り事業を継続していきたいと考えています。脳神経外科やMRI検査など全く無縁であった地域の方々に対して、脳神経疾患の啓蒙を行ってきたという点で、北海道の地域医療に大きな役割を果たしてきたと自負しています。

公益財団法人への移行に伴い良かったことは、理事や評議員を必然的に入れ替えることが出来たことです。病院関係者は理事では理事長の私一人、評議員は当医療法人副理事長の一名しかないので、研究所の私物化を企んでいた方々を排除することが出来ました。移行に伴い経理を調べたところ長年の不正が整理できましたし、問題の職員の退職に伴いすべての面で完全に明朗化されました。逆に残念なことは図書室を組織上病院に移行せざるを得なかったことです。研究所の所属であれば、脳神経外科や神経内科と関連性の低い一流誌を購入する意味はありますが、病院の管轄になれば病院の職員が利用しない雑誌は不要となります。もちろん病院の管轄になりましても、脳神経疾患に関する雑誌や書籍の充実度日本一を保つ努力は決して怠らないつもりです。

中村記念病院も昨年9月に救急医療の分野で社会医療法人に移行しました。団塊の世代が後期高齢者になる2025年に向けての医療制度改革の内容を拝見すると、私的病院の運営は今後益々大変になると予想されます。私一人ではなく、個々の職員とりわけ古い時代に育った幹部職員が、公益性の意味を真に理解し努力していただけると、病院も延いては研究所の更なる充実が期待されると考えています。

今年は養父である先代中村順一の十三回忌に当たります。養父が夢見ていた病院の姿に少し近づけたように思います。社会の変化に対応すべく自分自身の意識改革から進め、「東照公御遺訓」の「及ばざるは過ぎたるよりまされり」と空也上人の「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」を信条に、「チーム医療」を推進していく所存です。皆様方のご指導ご鞭撻を引き続き宜しくお願い申し上げます。